慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「京都学派教育学」における過去と未来 : 「永遠の今」に関する一考察
Sub Title	
Author	山田, 真由美(Yamada, Mayumi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2015
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.80 (2015.) ,p.110- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成26年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069957X-00000080-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

————, 2012, *Bildung anders denken. Einführung in die Theorie transformatorischer Bildungsprozesse*, Stuttgart.
Humboldt, W., 2010, Werke in fünf Bänden, hrsg. von Andreas Flitner u. Klaus Giel, Darmstadt.
Menze, C., 1965, *Wilhelm von Humboldts Lehre und Bild vom Menschen*, Ratingen.
斉藤渉，2009,「新人文主義―完結不能なプロジェクト―」『思想』，1023号，岩波書店，30–47頁.
曽田長人，2005,『人文主義と国民形成』，知泉書館.
Spranger, E., 1909, Eduard, *Wilhelm von Humboldt und die Humanitätsidee*, Berlin.
Wagner, H.-J., 1995, *Die Aktualität der strukturalen Bildungstheorie Humboldts*, Weinheim.
Wulf, C., 1996, „Die Vervollkommnung des Individuellen Anthropologie und Bildugstheorie Wilhelm von Humboldts“, In: *Anthropologisches Denken in der Pädagogik 1750–1850*, hrsg. von Christoph Wulf, Weinheim.

「京都学派教育学」における過去と未来
―「永遠の今」に関する一考察―

山 田 真由美

研究目的

本研究は，京都学派の思索における時間論の検討を通して，現在まで研究が進められる「京都学派教育学」の特色と問題を再考しようとするものである。本研究期間では，これまで筆者が中心的に論じてきた高坂正顕（1900–1969）とあわせて木村素衞（1985–1946）の思索に着目し，特に木村の著書『表現愛』（1939年）に展開される時間構造に関する議論を，高坂が論じた歴史哲学との関連において検討，これまで美的理論として再評価されることが一般的であった木村教育学の根柢に，「世界史の哲学」派と共通する歴史的時間の概念がとらえられていることを提起した。以下，本研究期間における研究の背景と成果を報告する。

研究の背景

近年，教育学の領域において，京都学派の思想を再評価する試みが広がっている。臨床的人間形成論の構築にあたり田中毎実が提起した「京都学派教育学」が，その端緒であるといえるだろう（田中2008）。戦時下の京都学派が大戦と積極的に関わりをもった事実は広く知られるが（大橋2001），1966年，高坂正顕を主査に迎えてまとめられた中教審答申・別記『期待される人間像』に対する批判をはじめ，特に戦後教育学の領域において京都学派は，これまで国家主義的思想として批判的に語られることが一般的であった（船山1981）。こうした批判に対し，その再評価の足掛かりとされてきたのが，同じく西田・田辺を師とする京都学派の哲学者として戦前より教育哲学を論じた，木村素衞の思想である。教育学の領域では，美学に関心を寄せた木村の思索を「美と愛の教育哲学」として，その「美的」側面を強調し，京都学派を再評価するための核としてきた（西村2005，大西2008）。しかし筆者がこれまで問題にしてきたように，木村を中心とした現在の「京都学派教育学」の範囲には，高坂をはじめ歴史哲学を論じた京都学派が含まれない（山田2014）。木村は京都学派のひとりに数えられながら，後の「世界史の哲学」派を構成した戦中の座談会『世界史的立場と日本』（1943）に参加しなかったこと，また戦時期の日記に綴られる苦悩の告白を理由に，歴史哲学を語った京都学派との関係を積極的に問われる

ことがなく，むしろ「世界史の哲学」派と思想的立場を異にするものと考えられてきたのである（村瀬2001）。しかし「京都学派教育学」という限り，木村と京都学派の思想的関連について慎重に検討しなければならない。戦前・戦中期における京都学派の主要な問題が，歴史的世界に台頭し歴史を動かす歴史的主体の探究にあったことはすでに指摘されるが（古田1956），同時期その「知的ネットワーク」（竹田2001）の内部で思索を形成したはずの木村もまた，彼らと同様の問題を課題としたのではないか。実際，戦中の木村は国民教育の問題を逼迫した課題として論じている。そこで本研究は，『表現愛』執筆期における木村の時間論を検討し，同時期「世界史の哲学」を論じた京都学派との接点を明らかにしようと試みた。

研究成果

1.『表現愛』（1939年）における歴史的時間

木村と京都学派の思想的関連について，まず着目したのは，『表現愛』の第一論文「身体と精神」（1938年）発表直後に，西田幾多郎から高坂正顕に宛てられた書簡の言葉である。木村の同論を読んだ西田は，高坂に次の言葉を書き送った。「木村君の「身体と精神」をお読みでしたか／同君も全く我々の圏内に入った様です」（西田2007, 225頁）。西田が1936年の論文「論理と生命」以後「歴史」の問題に関心を寄せたことは多く指摘されるが，一方の高坂もまた1934年に論文「歴史的なるもの」を発表，37年には『歴史的世界』を公刊し，歴史における主体の問題を論じている。そこで本研究は，西田から発せられた「我々の圏内」の意が「歴史」の問題にあったのではないか，との仮説のもとで「表現愛の哲学」を読みなおし，『表現愛』以前の論文「一打の鑿」（1933年）において想定されることのなかった歴史的時間の問題が，木村においてかえって重大な問題として論ぜられた旨を明らかにした。具体的には，「一打の鑿」で「永遠の今」として慎重に切り取られた非連続的なる表現の瞬間は，「身体と精神」において歴史性を獲得し，そこで主体の「表現」は過去と未来をつなぐ歴史的媒介点として論じられる。歴史的世界に存在論的規定を獲得した主体は，ここにはじめて歴史形成の主体としてあらわれる。歴史的世界における伝統と創造の自覚的媒介点を主体の表現に求める『表現愛』の議論には，たしかに同時期の京都学派と思想的接点が見いだせるのではないか。同論理における歴史哲学への関心が戦中期の国民教育論につながると思われるが，しかし木村の『表現愛』は高坂の場合と異なり，ただ現象する歴史的世界の構造を論じたのではない。

2. 表現的世界の構造と国民教育論について

木村は京都学派と同様の問題圏において「歴史的世界」を論じたが，たとえば歴史的世界の構造を現象学的に解明しようとした高坂の議論に対し，木村の論理では，歴史的世界をエロスの世界として，そのすべてを包越するアガペ的世界が想定される。木村によれば，アガペはエロス的なる歴史の世界を弁証法的に包む絶対無である。人間が絶望において自らの有限を自覚し，その救済の限界を自覚したエロスに対し，アガペは無限なる絶対的愛としてわれわれの前にあらわれる。つまり木村の『表現愛』では，歴史的に世界を創造する「表現」の弁証法的構造が説かれると同時に，表現において不断に構成される歴史的世界とさらに弁証法的構造を有するアガペ的世界の論理が説かれるのである。エロスが自らの限界に絶望するとき，歴史的世界のすべてはアガペによって救われる。アガペによる救済の論理こそ，西田哲学をはじめ京都学派の思索を越えて木村が確立したその哲学の独自性であり，そのことが

「美と愛の教育哲学」として戦後における再評価の中心を占めてきた。

しかし本研究は，木村がエロスを救済するアガペという二世界の弁証法的構造を主張しながら，その動的構造を可能にする媒介について明確に論じていないことを重大な問題として指摘した。つまり木村の『表現愛』の議論では，主体の表現を自覚的媒介点とした歴史的世界の弁証法的構造が説かれるものの，そこからアガペ的世界への跳躍を可能にする動的媒介の如何が明らかにされない。歴史の世界はいかにして無時間的なる絶対的愛の世界に到達するのか。その意味で同弁証法的論理の不徹底は，結局歴史的世界におけるすべての現象に対する「無条件」的救済を許してしまう。木村はエロス的なる文化・道徳の世界に対してアガペの世界を宗教的世界と規定するが，のちの国民教育論において，そのことは明らかな陥穽としてあらわれる。戦中，表現愛の論理を基盤に具体的な国民教育を論じた木村は，われわれの生きる歴史的現実を救済するアガペを，日本に固有なる「国体」に認めようとするのである。木村にとって「国体」は，現実のすべてを包む愛にほかならなかった。以上の議論を通して，木村と京都学派の思想的関連とその問題点を示し，さらに同問題が木村の論理に限ったことではなく「即」の論理を以て弁証法を語らんとする京都学派の理論全体に共通する問題であることを，今後の検討課題として提起した。

今後の課題

これまでに筆者は高坂正顕の思索を検討し，京都学派の歴史哲学と教育哲学の接続を試みてきたが，本研究においてはさらに戦前・戦中期にすでに教育哲学を論じた木村素衛が同様に歴史の問題を論じた旨を明らかにした。ただ高坂があくまで歴史的世界における主体の問題を探究したに対し，木村の場合は歴史的世界をエロスとして，さらにその世界と弁証法的関係を有するアガペ的世界の論理を準備する。その弁証法の不徹底を木村哲学の問題として指摘したが，両者の理論構造の相違は，京都学派の教育思想をいかに構成し得かということについて，さらなる検討と考察が必要である。本研究での成果を踏まえ，戦時期の木村が展開した国民教育論を含め，両者の議論を西田哲学・田辺哲学との関連においてさらに詳しく分析し，「京都学派教育学」全体像の解明を引続き今後の課題としたい。

なお本研究における研究の成果は，学会での発表（①自由研究発表「「生命の根源に対する畏敬の念」とはなにか―高坂正顕における人間と超越の問題―」（日本道徳教育学会第83回大会，昭和女子大学，2014年7月），②個人研究発表「木村素衛における歴史的世界への関心と国民教育の問題」（教育哲学会第57回大会，日本女子大学，2014年9月），③共同発表「今，「京都学派」研究から教育学は何を問うことができるか？」（教育思想史学会第回大会，慶應義塾大学，2014年10月），さらに，学会誌への投稿（山田真由美「高坂正顕における超越と人間の問題―「生命の根源に対する畏敬の念」についての考察―」日本道徳教育学会『道徳と教育』第333号，2015年）をおこなった。また高坂正顕の道徳教育論をまとめた小論「期待される人間像とヒューマニズム―高坂正顕の道徳教育論―」は，上廣倫理財団主催・平成26年度上廣道徳教育賞にて佳作を受賞した。

参考文献

大西正倫　2011 『表現的生命の教育哲学―木村素衛の教育思想』昭和堂
大橋良介　2001 『京都学派と日本海軍―新史料「大島メモ」をめぐって』PHP研究所
木村素衛　1997 （1939）『表現愛』こぶし書房
高坂正顕ほか　1943 『世界史的立場と日本』中央公論社

竹田篤司　2001 「下村寅太郎―『精神史』への軌跡」藤田正勝編『京都学派の哲学』昭和堂
田中毎実　2008 『臨床的人間形成論の構築』東信堂
轟孝夫　2004 「戦後の「京都学派」像―あるいは戦後における「哲学」の不在」大橋良介編『京都学派の思想』人文書院
西田幾多郎　2007 『西田幾多郎全集第22巻』岩波書店
西村拓生　2005 「京都学派における美と教育―木村素衛の表現論に即して」平成14－16年度科学研究費補助金・基盤研究B研究成果報告書「美的なもの」の教育的影響に関する理論的・文化比較的研究
船山謙次　1981 『戦後道徳教育論史』青木書店
古田光　1956 「第二次大戦下の思想的状況」遠山茂樹編『近代日本思想史第三巻』青木書店1956
村瀬裕也　2001 『木村素衛の哲学―美と教養への啓示』こぶし書房
矢野智司　2014 「人間学―京都学派人間学と日本の教育学との失われた環を求めて―」森田尚人・森田伸子編『教育思想史で読む現代教育』勁草書房
山田真由美　2014 「高坂正顕の教育思想における「主体」概念」『教育哲学研究第109号』教育哲学会